

「エクспリマチュア・チャイルドの 長期養護」に関する研究

分担研究者	日本大学小児科	馬場	一雄
研究協力者	東邦大学周産期センター	藤井	とし
	名古屋市立大学小児科	小川	雄之亮
	国立武蔵神経センター	有馬	正高
	愛知県心身障害者コロニー	高橋	彰彦
	国立精神衛生研究所	池田	由子
	伊豆通信病院	森永	良子
	国立長崎中央病院小児科	増本	義

当研究班は、未熟出身児 *expremature child* の追いつけ成長に関する研究、行動学的研究および疾病に関する研究を目的としている。具体的には成長・発達の評価基準を決定すること、未熟出身児を持つ家庭の親子関係、児の行動特性などを明らかにすること、随伴する発達障害、好発する疾病の実態を明らかにすること等である。

今年度はそのうち、各研究協力者により、ハイリスク新生児の *outcome score* の作成、未熟出身児の被虐待児症候群、未熟出身児を精神発達について分析し、発達の評価基準の基礎成績の作成、未熟出身児（超未熟児）の生育状況の調査、双胎児の発達について、とくに乳児期から12才までの *follow up*, LD・MBD における低出生体重児の考察、および双胎に伴う脳障害の発生要因に関する検討等についての研究が行われたのでその概要を報告する。

馬場は後障害として脳性麻痺をのこした例に対し、その危険因子を検討し、ハイリスク新生児の *outcome score* の作成を試みた。カイ自乗検定法で選別された30項目の *perinatal risk factors* につき、更に脳性麻痺の有無に対し、カイ自乗検定を行ったところ、在胎週数30週未満、Apgar score (0~4)、敗血症・髄膜炎、無酸素性脳障害、頭蓋内出血、痙攣、低血糖の7項目が統計的に有意と判定され、これに母親の年齢40才以上を加えた8項目が重要度の高い因子とみなされた。さらに重回帰分析を行って求めたハイリスク新生児の *outcome score* を合計すれば脳性麻痺発生の条件つき確率を表わすことになることを指摘している。次に、馬場は、未熟児室出身児で被虐待児症候群と思われる症例を経験したので報告し、被虐待児の中の未熟児室出身者についての検討を加えた。

小川はエクспリマチュア・チャイルド110例の暦年令 18 ± 1 カ月時およびこのうち55例の暦年令 30 ± 1 カ月時における津毛・稲毛式精神発達テストによる精神発達について分析し、発達の評価基準の基礎成績の作成を試みた。在胎28週以下の群においては、18カ月時の発達指数は100に達せず、5領域全てにおいて37週以上の群よりも有意に低値を示した。しかしながら、修正年令、修正発達指数を用いると全ての在胎群で正常域を示した。30カ月時の発達指数は各在胎群共正常域にあり、最も在胎の短い群でも2才半時には精神発達の面でも完全な *Catch up* が認められた。また18カ月から30カ月の1年間

の精神発達の上昇は著しく、これは在胎32週以下の例でとくに顕著であった。以上の成績から、1才半時はよいが2才半時には未熟出身児については修正年令を用いる場合は注意を要すると結論づけている。

高橋は未熟児を出産した母親が、児の成長の過程で経験した困難とその解決のしかたを、母親が受けた援助との関連で検討し、1,000 g未満の16例について、児童の身体計測、発達検査と、母親との面接による聞き取り調査とを行った成績を報告した。

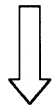
池田は双生児について、身体・精神発達の面で、幼児期、学童期を通してどのような発達の状況を示すかを検討した。その結果、次の点が見出された。(1)身長・体重は大部分は3才～6才までに平均に追いついている。(2)知能発達も幼児後期(6才)には平均発達を示すものが多く、年令がすすむにつれてIQが高くなる傾向がある。(3)発達障害を示した例は周産期障害によることが多い。(4)発達障害は1卵性双胎児で一致することが多いが、不一致の少数例が存在する。(5)自閉症状を示す場合は一卵性双胎児では一致、二卵性双胎児では不一致であった。(6)幼児前期には言語発達遅滞を示すことから、双生児母親グループの如き早期のグループワークは意味がある。以上の点を指摘している。

森永は低出生体重児の精神発達予後について報告している。LD、83名中、低出生体重児は11名(13%)、MBDは20名中、3名(15%)であり、低出生体重児の予後は、LD、MBDのハイリスクを持っていることを指摘している。LD、MBDは言語発達遅滞という、言語性能力に影響をあたえる障害をもつものが多いが、始歩の時期など、運動発達が正常範囲に入るものがほとんどであり、放置されてしまう傾向が認められている。言語発達の基礎は、理解の段階が重要であり、特に低出生体重児は、乳児期の言語刺激が少ない環境におかれるものもあるので、治療的な環境の配慮が必要と考えられると報告している。

増本は離島(対馬・五島・宍岐・生月)で出生後に空輸にて収容された異常新生児の長期予後と退院後の養育態度を検索するために基礎的検討を行った。離島から空輸された児の両親の面会は限られており、両親・家族の精神面での負担となっていると考えられ、退院後の養育に多くの問題をかかえていることを指摘している。

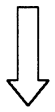
藤井は微細脳損傷症候群 minimal brain dysfunction syndrome (MBD)について、検査方法のなかの視覚認知テストである Bender Gestalt test の評価について検討し、MBDと新生児期の要因との関係を検索した。対象は都立築地産院で保育・治療した新生児のうち5才以上 follow up し、MBDのテストを行った103例である。検査は soft neurological sign についてのテストと Bender Gestalt の視覚認知テストを行った。成績をまとめると、(1) Bender Gestalt test は7才以下では出生体重1,500 g以下の群は1,500 g以上の群に比し高い得点数、即ち認知の誤りが多かった。5～6才で異常値を示した例も8～9才以上では正常範囲内に入る傾向にあった。(2) MBDと診断された症例は8例で低出生体重児が6例、成熟児が2例であった。Perinatalの合併症として重症妊娠中毒症、糖尿病、新生児低血糖症、RDS、頭蓋内出血がみられた。

有馬は双胎に伴う脳障害の予防に役立てるために、心身障害児のうち双胎妊娠例とその対偶について検討し、障害発生の要因の過渡的分析を試みた。その結果は双胎に伴う障害児では高率に分娩時や早期新生児期の異常がみられ、ことに分娩時には第2子に riskが高いことを示している。一方、双胎妊娠では母体異常も70%の多数にみられ、SFDや、双胎としても小さいIUGRの例が多いこと、出生体重差の大きい例が多いことなども、より小さい例に障害が集中していることに併せて注目されると報告している。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



当研究班は、未熟出身児 *expremature child* の追い上げ成長に関する研究、行動学的研究および疾病に関する研究を目的としている。具体的には成長・発達の評価基準を決定すること、未熟出身児を持つ家庭の親子関係、児の行動特性などを明らかにすること、随伴する発達障害、好発する疾病の実態を明らかにすること等である。

今年度はそのうち、各研究協力者により、ハイリスク新生児の *outcome score* の作成、未熟出身児の被虐待児症候群、未熟出身児を精神発達について分析し、発達の評価基準の基礎成績の作成、未熟出身児(超未熟児)の生育状況の調査、双胎児の発達について、とくに乳児期から 12 才までの *follow up*, LD・MBD における低出生体重児の考察、および双胎に伴う脳障害の発生要因に関する検討等についての研究が行われたのでその概要を報告する。

馬場は後障害として脳性麻痺をのこした例に対し、その危険因子を検討し、ハイリスク新生児の *out-come score* の作成を試みた。カイ自乗検定法で選別された 30 項目の *perinatal risk actors* につき、更に脳性麻痺の有無に対し、カイ自乗検定を行ったところ、在胎週数 30 週未満、*Apgar score*(0~4)、敗血症・髄膜炎、無酸素性脳障害、頭蓋内出血、痙攣、低血糖の 7 項目が統計的に有意と判定され、これに母親の年令 40 才以上を加えた 8 項目が重要度の高い因子とみなされた。さらに重回帰分析を行って求めたハイリスク新生児の *gutcome score* を合計すれば脳性麻痺発生の条件つき確率を表わすことになることを指摘している。次に、馬場は、未熟児室出身児で被虐待児症候群と思われる症例を経験したので報告し、被虐待児の中の未熟児室出身者についての検討を加えた。